

ギュスターヴ・モロー展・ サロメと宿命の女たち

パナソニック汐留ミュージアム 2019.04.06～06.23

あべのハルカス美術館 2019.07.13～09.23 福岡市美術館 2019.10.01～11.24

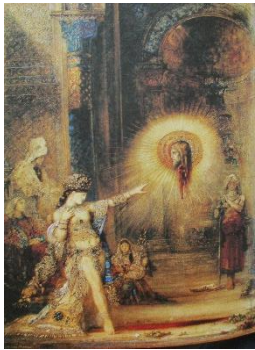
+

「ギュスターヴ・モロー」(1826～1898)は、19世紀末から20世紀にかけて活躍したフランス人画家で、特に聖書や神話を題材として幻想に満ちた神話の絵画や、魅惑的な女性像を数多く描いたことで知られる“独特で異彩を放つ希有の名匠”である。

とりわけ、新約聖書や聖書を主題にして独自の世界を表現した作品として名高い《出現》や、洗礼者「聖ヨハネ」の首を望むヘロデ王の娘《サロメ》を描いた一連の絵画は、世紀末の芸術における“ファム・ファタル(宿命の女)の象徴”として名高い。

本展は、パリ・モロー美術館の協力で「モロー」が愛した身近な女性からファム・ファタルまでの多彩な女性像の作品を紹介して、その創造性の原点に迫る企画である。

ギュスターヴ・モロー 《出現》 1876年頃 油彩/カンヴァス



画伯の傑作中の傑作品とされ、「サロメ」が舞い終えた後の褒美として望む筈の洗礼者「ヨハネ」の首が、踊りの途中で幻影となった中空に現れるという独創的な作品は、象徴的かつ幻想的に画面を構成しているのが特徴である。オリент風の衣装をまとった舞姫が指さす前には、血がしたたる生首が浮いていて生首からは後光が眩しいばかりに放たれ、突然出現した聖なる首によって一瞬に凍りついた情景が描かれているショッキングな作品である。

ギュスターヴ・モロー 《サロメ》 1875年頃 油彩/カンヴァス



画伯は、自らの女性像の原点を探るかのように、裸体に近い姿でポーズをとる「サロメ像」を、油彩・水彩・デッサンを含めて「50数点」も描いている。その目的は、明らかに「サロメの衣装」にあるとされ、胸にはきらびやかな宝石のダイヤモンドの環をつけた首飾りをかけ、豪華な暗褐色の大きなマントを長く後ろに引いて、一足ごとに大波に送られて静かに歩みを進める姿の作品は、“19世紀の象徴の先駆者”といわれ、当時の人々に強烈な印象を与えたとされている。